

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320094

研究課題名(和文) 多言語・多文化化する学校に対応できる教員養成・教員研修システムの開発に関する研究

研究課題名(英文) Developmental Study of Training System for Pre- and In-Service Teachers for Multilingual and Multicultural Schools

研究代表者

濱田 麻里 (Hamada, Mari)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：80228543

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,300,000円、(間接経費) 3,390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、多言語・多文化化する学校に対応できる教員(以下、多文化教員と呼ぶ)を養成する学部教員と現職教員を対象とする教師教育システムを開発するためのアクション・リサーチである。研究では、海外との比較調査、受講者へのアンケート調査等による実践したプログラムの分析を行った。最終成果として、開発されたプログラムの一部を『実践例集』として公開した。

研究成果の概要(英文)：The study is an action research which explores how to develop training system for pre- and in-service teachers for multilingual and multicultural schools.

Comparative study was done between Japanese and American teacher training systems. The practices of teacher training for pre- and in-service teachers were analysed by using questionnaire of the participants. The revised training programs were collected and published as a resource book for teacher trainers.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語指導の必要な児童生徒 多文化教員 教員養成 現職教員研修 教師の成長

1. 研究開始当初の背景

日本の学校で多様な言語文化背景をもつ子どもたちが学校での学習において直面する課題について論じられるようになって久しい。なかでも日本語の学習をめぐる問題は子どもの認知発達にも影を落とす深刻な問題である。

しかし、このような子どもたちの日本語指導に当たるために学校教員には新たにどのような資質・能力が必要とされるのか、またそれをどのようにして身につけていくのかに関して、学校教員養成の分野でも、日本語教育の分野でも、十分な議論が行われてこなかった。そこで申請者らグループは平成20~22年度の3ヶ年の計画で科学研究費基盤研究C「多言語・多文化化する学校で求められる教員の日本語教育に関する資質・能力とその育成に関する研究」(以下、「基盤C」と略)を実施し、学校教員に必要とされる能力資質について調査を行ってきた。その結果、多文化状況特有の子どもへの教育課題の認識や、自らの文化を批判的に捉える視点については、認識がじゅうぶんでないことが明らかになった。また、教員が現場で新たな教育課題に出会うことをきっかけに成長をとげる。そのため、課題を克服し、自らの成長に結びつけていくための「課題解決能力」が必要であることがわかった。

2. 研究の目的

本研究においては、(1)教員養成課程において多言語・多文化の背景をもつ子どもたちの日本語指導に必要な資質を養うためのシステムと(2)現在教壇に立っている現職教員が多言語・多文化の背景をもつ子どもたちの日本語指導に必要な資質能力が獲得できるような再研修システム、の2つを開発する。プロジェクトメンバーが開発し、自身が試行し効果を検証しながら改善して、社会に提案する。

3. 研究の方法

海外調査も含めた理論研究により多文化化に対応できる教員養成・教師教育研究の新たな枠組みを策定する。同時に、望ましい教員養成・教員研修のあり方を探るため、すでに明らかになった学校の多文化化で必要になる教員の資質・能力を養成するため、教員養成・現職教員研修の内容や方法を設計し、実際にメンバーが関わる教員養成や現職教員研修の場で実践を行うというアクション・リサーチを行う。

最終年度には研究成果をテキストやマニュアルの形にまとめ、関係者に配布し、評価を受ける。

4. 研究成果

(1) 理論研究

教師教育の新たな視点を得るため、ドイツ(バーデンビュルテンブルグ州)、アメリカ

(カリフォルニア州およびミシガン州)において授業見学および関係者の聞き取り調査を行った。ミシガン州では、現職教員に対するワークショップにもあわせて参加した。また、文献により教師教育に関する情報を収集した。海外における調査や学会から、日本語と諸外国は、多様な言語文化背景をもつ児童生徒の在籍規模においては大きく異なるものの、一般の学校教員は必ずしも多言語多文化環境に対する十分な研修を受けて現場に立つわけではないという点では、直面する課題は共通である。

また、実践者の指導力の向上における研究者と学校現場との協働のあり方を考えるため、アメリカミシガン州における協働の実践例と日本の全国および都道府県レベルで行われている研修の例とをそれぞれケーススタディとして分析し、比較した。アメリカ側のケーススタディでは、ESLの子どもへの読み書き能力を向上させるため、専門知識をもつ研究者がメンターとなり、双方向イマージョンのような新しい教育環境の創生に積極的に関与している様子が紹介された。このように実践の改善に協力することは研究者の社会的責務とされていた。一方、日本側のケーススタディの分析では、研修が単に研究者が求めに応じて専門知識を提供するというのではなく、実践者との協働によって作り上げられるべきものであること、また、そのプロセスで双方の成長が促される必要があることが浮かび上がった。

(2) 教員養成システム開発

メンバーが担当する学部生を対象とした授業において、実践を記録し、学生の反応を質問紙法などによって収集した。問題を子どもの心理の問題に帰着させる傾向が見られた。しかし、多言語・多文化の背景をもつ子どもたちの問題は、個人的なマクロのレベルだけでなく、メゾ・ミクロレベルの課題が複合して生じていることが多いため、例えば言語政策等、多様な観点から問題を捉え直させたりして、問題の根源にあるものは何かを考えさせる必要がある。その上で「隠れたカリキュラム」についての自省的問い掛け(田淵2007)や、ソーシャルワーカーをはじめ多様な人々との連携の重要性に目を向けさせることが求められる。また、学生の認識に働きかけるためには、段階性を意識したカリキュラムの組織化や参加型の活動の工夫が重要であり、学校現場との一層の連携が求められることが示唆された。

(3) 現職教員研修システム開発

(2)同様、現職教員を対象とした校内研修、教育委員会主催の研修に分担者が協力した場合に、その感想を質問紙によって収集した。また、教員のライフヒストリーを収集し、学校教員が多様な言語文化背景の子どもたちに対する実践の中でどのようにキャリアを

形成しているのかを探った。また、職教員については、2つの研修をケーススタディとして検討した。2つのケースにおいて現職教員の学びを引き起こした特徴を分析したところ、多様な実践や課題に触れることが、他者との対話を引き起こし、新たな視点を提供していた。それが結果的に、教員の気づきと実践改善のための具体的な方策の工夫を引き出すことにつながっていた。

(4) 『実践例集』作成

開発したシステムを『実践例集』の形で冊子としてまとめ、関係者および関係諸機関に配布した。

実践例集に収録した実践はいずれも本プロジェクトのメンバーが自身で開発し、実際に実践したものである。大学の1学期間の授業科目として行われたもの、地域との協働による現職教員や地域の支援者を対象とした研修、実習やボランティア体験といった実地教育など、多様な形態の養成・研修がある。またさまざまな授業や研修で使える活動も収録している。それぞれの実践は「対象」「目的」「時間数」「内容」の観点から整理し、最後には実践してみた振り返りも掲載している。さらにプロジェクトメンバーが提案した「多文化教員養成のための教育課程構成案」に基づき、それぞれの実践で多文化教員に必要なとされるどのような資質や能力が養われるかという観点からも分析を行っている。

表1 多文化教員養成のための教育課程構成案

講義形式(知識)	教育実践・授業実践	自己の成長	学習環境づくり
	・言語/日本語学 ・教育・発達心理学 ・第二言語習得論 ・バイリンガル教育 ・学習論・日本語教育方法論 ・(異文化)コミュニケーション ・コースデザイン ・教材開発論 等	・教育論 ・教師論(教師の成長) ・キャリア形成 ・実践研究の方法 ・自律的学習 等	・異文化間教育 ・比較教育学 ・ネットワーク論 ・組織論 ・言語政策・移民政策 ・民族政策の歴史 ・社会情勢 等
参加型の授業(技術)	・事例分析を通して子どもの言語習得・心理的社会的状況の分析力を強化 ・模擬授業や授業案作成などの活動を通して、授業の設計力、教材開発力、授業運営力を養成	・報告書などによる地域の状況の理解 ・文化摩擦の事例による自文化の自省的捉え直し ・課題解決活動による他者と「協働する力」及び内省力の養成 等	
現場で(現場力・共感力)	・学校や授業の参観と記録 ・実習(授業、教育活動) これらの活動を通して、教育実践力、社会的実践力、自己成長の力を養成	・支援活動(学校で、地域で) ・学校現場へのフィードバック	

この種の実践が冊子という形でも公にされるのはこれまで例を見ないことであり、各所からは大きな反響が得られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計16件)

- 橋本ゆかり(2013)「教育をデザインする - 実習を基盤とした年少者教育問題の探究 -」『教育デザイン研究』4, 査読無
- 橋本ゆかり(2013)「個の学びと協働による学び-実習を振り返って」『2012年度日本語教育実習報告書』3-5, 横浜国立大学教育人間科学部日本語教育コース, 査読無
- 橋本ゆかり(2013)「外国につながる子どもたちの学習におけるつまづきとその原因 - 実習と学習支援教室参加を通して」『言語文化と日本語教育』45号 日

本言語文化学会

- 市瀬智紀(2012)「グローバル化する学校現場における新たな実践の創造-宮城教育大学附属国際理解教育研究センターの経験から-」『日本教育』413, p.18-21
- 市瀬智紀(2012)「グローバル人材の育成を目指す学校教育」『中等教育資料』2013年1月号, p.16-21
- 金田智子(2012)「在住外国人に対する「言語学習」の重要性」『自治体国際化フォーラム』272, p.2-5
- 金田智子(2012)「Column 実践を目に見える形にする - 地域ボランティア教室から」『言語教育実践イマ×ココ』創刊準備号, p.18
- 金田智子(2012)「「生活者」としての外国人に対する日本語教育の確立をめざして」『国語研プロジェクトレビュー』3, p.141-151
- 金田智子(2012)「国内日本語教育における課題 「生活者」に焦点を当てて」『学習院大学人文科学研究報告』2012, p.81-84
- 齋藤ひろみ(2012)「実践を記す・実践を伝える・実践から学ぶ」『言語教育実践イマ×ココ』創刊準備号, p.3-9
- 齋藤ひろみ(2012)「多文化化する学校で求められる教員の資質・能力」『兵庫教育』741, p.6-9.
- 齋藤ひろみ(2012)「異文化間教育と「臨床の知」「文化的多様性」の実践に向けて」『異文化間教育』35, p.1-13
- 徳井厚子(2011)「学生のとらえる「多文化教師の資質・能力」」『教育実践研究』12, p.111-118
- 齋藤ひろみ(2011)「日本語教室における教師・子ども間の相互作用-内容重視型の日本語の授業における会話の分析を通して-」『国際教育評論』8, p.1-11
- 市瀬智紀・須藤伸子(2010)「外国につながる子どもたちの教育と未来くらしと世界をむすぶ学び みちのくから考える共に生きる“地域社会”づくり」『第27回開発教育全国研究集会報告書』p.15-59.
- 徳井厚子(2010)「協働的問題解決力育成のための実践の試み-外国につながる子どもに対応する教員養成の授業から-」『信州大学教育学部附属教育実践センター紀要 教育実践研究』11, p.69-78.

[学会発表](計14件)

- 齋藤ひろみ・浜田麻里・石井恵理子「大学における参加型授業を通じた対話と協働の可能性 -多文化多言語社会における教師養成-」, 異文化間教育学会, 2012年6月9日, 立命館アジア太平洋大学.
- Mari Hamada, Hiromi Saito & Tomoko

Kaneda “ Designing Teacher Education for the In-Service JSL Teachers. ” The Japan-U.S. Teacher Education Consortium (JUSTEC), Naruto University of Education, July 8, 2012
金田智子「在住外国人に対する日本語教育の必要性」北朝鮮難民救援基金主催シンポジウム「定住者問題と日本語教育」, 2013年2月24日, 明治大学
浜田麻里・金田智子, 齋藤ひろみ, 徳井厚子・河野俊之・橋本ゆかり・上田崇仁・川口直巳・市瀬智紀「日本語を母語としない子どもに関する大学生の認識 学校教員養成課程と日本語教師養成課程で養成すべき資質とは? 」日本語教育国際研究大会, ポスター発表, 2012年8月18日, 名古屋大学
浜田麻里「海外での異文化体験と学校教員の力量形成—タイ派遣日本語教員経験者へのアンケート調査から—」異文化間教育学会, 2011年6月12日, お茶の水女子大学
浜田 麻里「異文化環境における日本語教師の学びと人間形成—タイ派遣日本語教員へのインタビューから—」日本語教育国際研究大会, 2011年8月18日, 中国・天津
齋藤ひろみ「小学校の「日本語教室」との交流による学部学生の認識変容—初等教員養成課程「日本語教育選修」コースの実践から—」日本語教育国際研究大会, 2011年8月18日, 中国・天津
浜田麻里・齋藤ひろみ・桶谷仁美・金田智子, 司会: 市瀬智紀「現職多文化教員の研修—教育現場と研究者との相互対話を通じた成長を目指して—」2011年日本語教育学会秋季大会, 2011年10月9日, 米子コンベンションセンター,
齋藤ひろみ・浜田麻里「学校教員の「多様な言語背景をもつ子どもたちへの教育」の力量形成の過程 教育経験の異なる教員へのインタビュー調査から」日本語教育学会 2010年度春季大会 ポスター発表, 2010年5月23日, 早稲田大学
徳井厚子「協働的問題解決能力育成のための授業実践の試み—外国につながる子どもに対応する教員養成の授業から」日本語教育学会 2010年度春季大会 ポスター発表, 2010年5月23日, 早稲田大学
上田崇仁「植民地朝鮮の新聞『毎日申報』に連載された「国語」(日本語)講座の分析」世界日本語教育大会, 2010年8月1日, 台湾国立政治大学
浜田麻里「多様な言語文化背景をもつ児童生徒に対応できる教員の養成における実地体験の意義—講義・実地活動参加学生の調査から—」世界日本語教育大会, 2010年8月1日, 台湾国立政治大学
齋藤ひろみ・浜田麻里・上田崇仁・西川

朋美・河野俊之「学校の多言語・多文化化に対応する教員を養成するための教育課程について考える 教員養成系大学における日本語教育コースの取り組みから」日本語教育学会 2010年度秋季大会パネルセッション, 2010年10月9日, 神戸大学
齋藤ひろみ・浜田麻里「多文化社会の学校教員養成について考える養成システムのモデル化を目指して」津田塾大学千駄ヶ谷教育研究機構プロジェクト第7回「多文化社会における言語教育を考える 日本語, 国語, 英語, 外国語教育の連携」2010年11月10日, 津田ホール

〔図書〕(計1件)

齋藤ひろみ, 他(2011)『外国人児童生徒のための支援ガイドブック-子どもたちのライフコースによりそって-』凡人社(総191頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱田 麻里 (HAMADA, Mari)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 80228543

(2) 研究分担者

市瀬 智紀 (ICHINOSE, Tomonori)
宮城教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 30282148

上田 崇仁 (UEDA, Takahito)
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 90326421

金田 智子 (KANEDA, Tomoko)
学習院大学・文学部・教授
研究者番号: 50304457

河野 俊之 (KAWANO, Toshiyuki)
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号: 60269769

齋藤 ひろみ (SAITO, Hiromi)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号: 50334462

徳井 厚子 (TOKUI, Atsuko)
信州大学・教育学部・准教授
研究者番号: 40225751

川口 直巳 (KAWAGUCHI, Naomi)
愛知教育大学・教育学部・講師
研究者番号: 60509149

橋本 ゆかり (HASHIMOTO, Yukari)
横浜国立大学・教育人間科学部・講師
研究者番号: 40508058